

情報リテラシー教育：全学共通科目について

平 元 みさえ

大学図書館をめぐる情報環境は、この数年、電子ジャーナル・CD-ROM等出版形態の多様化、インターネットの普及などにより、図書館の電子化へと大きく変化してきている。これらの状況は、大学の教育・研究活動に反映し、情報収集活用能力が不可欠の要素として求められるようになってきている。

附属図書館は、情報収集活用能力形成の一助とするため、平成10年度から情報リテラシー教育の一環として、全学共通科目「情報探索入門」の提供部局として参画し、科目の開講を実現し支えてきた。開講は、平成9年2月頃に、当時の館長であった長尾真教授（現総長）から授業計画の提案があったことに端を発している。平成10年度前期課程として開講され、講義テキストとして、附属図書館発行の『access.txt文献調査・利用ガイド』が使用された。平成11年度は、講義録をもとに編集・出版された『大学生と「情報の活用」』注1)が、テキストとして追加された。

講義は、「論文・レポートを書くための文献・情報収集、卒業論文作成のための文献調査等に必要な情報活用技術を演習によって習得させながら、情報図書館学、情報探索学の概要を学ばせる」ことを目的とし、長尾総長をはじめ5名の教官が講義を分担し、それぞれ講義に対応した演習に、附属図書館・学部等図書室の図書館職員15名が補助者として参画するという形で実施されている。

平成11年度の講義概要は、別表のとおりである。11年度は、担当教官に新たにベッカー教授が加わり強化・充実が図られた。

図書館の役割は、事務局としての役割（企画立案、実施に関わる事務処理等）と、演習補助担当の役割の二つに大別される。企画立案の段階から図書館職員も参画し、司書としての経験をふまえた議論が、講義・演習に反映されている。また、演習課題を積極的に提案するなど、

教官に協力する形ではあるが、授業に関わる中で、自己研鑽の機会として（特に若手職員にとって）、情報リテラシー教育の方向を探る機会として、得難いものとなっている。これは、講義に関わる諸々の負担を超える大きなプラスの要素でもある。

演習補助には、附属図書館職員だけでなく、学部等図書室職員にも参加協力を得ており、全学的に情報リテラシー教育を考える契機になることも期待される。

平成10年度・11年度共、アンケート回答者のほとんどから「少し難しい内容だったが、将来、絶対役に立つと思う」「文献の調べ方もコンピュータを使って行うというこれから先につながりそうな演習内容はとてもよかった」等、「役に立つ」との高い評価を受けて、引き続き平成12年度も開講することが決定され、教官から提案のあった演習時間の拡大も含めて来年度開講に向けて検討が開始されている。このように「情報探索入門」は、全学共通科目の一科目として定着する方向にあり、年を重ねる中で、一層充実していくものと思われる。今後は、この講義に関わる中で、情報リテラシー教育のあり方を探り、多様な形の教育を検討・提供していくことが課題であると考えている。

（ひらもと みさえ：

附属図書館情報サービス課参考調査掛長）

注1) 監修：長尾真／編集：川崎良孝
発行：京都大学図書館情報学研究会
発売：日本図書館協会

平成11年度講義概要

- 第1週 大学図書館への招待
講義：長尾真総長
- 第2・3週 分類の一般概念と分類理論
講義・演習：黒橋慎夫
(情報学研究科講師)
- 第4週 学問・研究・文献・情報
講義：川崎良孝(教育学研究科教授)
- 第5・6週 参考資料の種々とその利用
講義・演習：カール・ベッカー

(総合人間学部教授)
第7・8週 目録情報とその利用
講義・演習：川崎良孝
(教育学研究科教授)
第9・10週 データベースの種類とその利用法
講義・演習：金子周司

(薬学研究科助教授)
第11・12週 インターネット情報と利用法
講義・演習：金子周司
(薬学研究科助教授)
第13週 情報探索とその周辺
講義：菊池光造附属図書館長

図書収書システムを使って

島 文 子

1. 図書収書システムとは

閲覧カウンターや目録登録などの図書館業務に比べると、受入業務は事務的で地味な仕事です。選書、発注、検収、物品登録、支払準備、予算管理、原簿管理、受入統計処理などと並べてみても、どちらかといえば図書館らしくない仕事ばかりです。しかし、この仕事は図書館の構成要素の一つである資料（蔵書）を形成していく重要な役割を担っています。また、図書館・室設置以来手作業で行われてきた部局独自の方法が色濃く残っている分野でもあります。図書収書システムは、こうした図書受入業務の歴史と実務の全般を、図書館業務システムの中にトータルに組み込むことを目指したものです。

2. 収書トータルシステムの特徴

新しい図書収書システムの大きな特徴の一つは、受入から目録までを見通したトータル処理システムであるということです。簡単に言えば、収書システムと目録システムとの間でのデータの使い回しができるシステムです。例えば、図書の発注を行う際には、必要なタイトルや出版社などの情報をわざわざ手入力せずに、ローカル目録やNACSIS-CATにある書誌データを利用して、発注用書誌を作成して使います。逆に目録登録の際には、この発注用書誌から検索キーを取り出して、作業が楽にできるようにしています。検収時には、発注レコードのデータから所蔵レコードを自動作成し、それを目録登録時にもそのまま利用します。選書の際にも、目録システムの中にある選書用書誌を利用してリストを作成した後、選書結果のデータを発注レコ

ード作成に利用することができます。このようなデータの使い回しが利くようになって、データ入力や検索にかかる手間やミスが少なくなり、処理が早く正確にできるようになりました。検収段階から所蔵検索ができるため、重複調査が正確にできるというメリットもあります。また、発注・検収・物品登録などの機能が、予算管理や原簿管理、統計管理などの機能と連携しているので、担当者が意識して計算したりデータ入力したりしなくても、いつでも最新の予算執行データや受入統計データを取り出すことができるようにもなりました。

3. 登録番号管理のシステム化

図書収書システムのもう一つの特徴は、システムの部分的導入ができるということです。全部局を対象にした受入業務の機械化は、年間総受入数が9万冊を超える京都大学が初めて経験する大きな変化であるため、個々の部局の事情に合わせて、段階的に無理なく図書収書システムの導入を進められるようにという配慮から生まれたものです。部分導入の対象になるのは、図書登録番号の取得システムです。本学では図書登録番号を全学で一元管理しており、従来は各部局図書館・室で作成された命令書を附属図書館に集中し、一括して登録番号の付与を行っていました。新システムでは、これを各部局からオンラインで実行できるようになりました。この登録番号取得システムは、発注・検収を手作業で処理していても利用することができます。従来どおりのマニュアル処理を活かしながら、登録番号管理だけをシステム化できるわけです。登録番号管理がサーバ側で一元的に行わ